

谷崎潤一郎全集拾遺雜纂

細 江 光

昨年までに、私は、『甲南国文』(第38号)『甲南女

子大学・研究紀要』(第27・28号)に『谷崎潤一郎全集逸文紹介1・3』を掲載した。今回は、その補遺として、片々たる断簡零墨・談話・作者記の類を集め、参考に供する事とした。なお翻刻の際には、誤植はそのままとし、ルビは省き、旧漢字は新漢字に改める事を原則とした。

【逸文類】

最初に逸文の類を紹介する。

1. 『懸賞小説応募者諸君へ』

「女性」大正十三年二月号

これは、関東大震災直後の大正十二年十月号から、雑誌「女性」が行なった懸賞小説募集で、選者となっていた谷崎潤一郎・鈴木三重吉・小山内薫の連名で掲載されたものである。実際の筆者は誰か分からないが、参考の為に掲げておく。なお、この時の予選合格者の中には、清水三十六・高群逸枝・大谷藤子らの名前も見える。

* * *

懸賞小説応募者諸君へ

震災後本誌が新進諸君の為に募集した懸賞小説は予想外に多数の応募を得て選者たる吾々も欣幸に堪へません。規定通り締切に期限はないのですが、一先づ最初に入手した五百余篇を第一期として、これの予選を本号に発表しました。この内から更に入賞作品を厳選して、来月号から一篇宛発表することにします。なほこの募集は別項広告の通り続行致す筈ですから、続々御寄稿を願ひます。

大正十二年十二月二十八日

谷 崎 潤 一 郎
鈴 木 三 重 吉
小 山 内 薫

2. 『女性懸賞募集映画劇「筋」当選者発表』

「女性」「苦楽」大正十三年十一月号

これは、プラトン社が、大正十三年六月に雑誌「女性」と「苦楽」誌上で行なった映画劇「筋」懸賞募集の当選発表の際に、選者となっていた谷崎潤一郎と小

山内薫の連名で発表されたものである。実際の筆者は誰か分らないが、参考の為に掲げておく。なお、この時、渡辺裕の『影』を一等に選んだ経緯等については、『春寒』に詳しい。

* * *

女性懸賞募集映画劇「筋」当選者発表

応募原稿は三千百八十九篇に及んだ。全く採るに足らぬものを捨てて、予選六十七篇を得た。これはいづれも相当価値のあるもので、この内少くとも三十篇は現今日本で行はれてゐる映画劇の水準以上にあると言ひ得る。選者はその内最も優秀だと信ずるものを三篇選んで、更にその三篇に一二等の等級を附した。しかしそれだけで済ますのは余りに惜しいので、更に選外十篇を採ることにした。

兎に角この募集は近來にない成功だったと言ひ得る。自分等はこれら当選のストオリイが一日も早くフィルムとなつて市上に現はれるのを待つ。

谷 崎 潤 一 郎

小山内 薫

3. 菊原琴治碑文

これは、昭和三十一年三月、故菊原琴治検校の十三回忌に、大阪四天王寺境内に建てられた「検校菊原琴治君碑」の傍らの石碑に刻まれたものである。谷崎がこの種の仕事を引き受ける事は極めて珍しく、恐らく生涯を通じてこの一度だけではなかったかと思われる。この事は、谷崎が検校の恩にいか感謝していたかを物語るものと言えよう。

谷崎は、昭和二年六月頃から数年間、菊原琴治に地唄を習った。菊原琴治の娘初子氏の『地歌ひとすじ』（なにわ塾叢書2）によれば、谷崎が京都の祇園で地唄を聞いて、「朝日新聞」の松阪青溪に地唄を習いたいと洩らした所、松阪が旧知の菊原琴治を谷崎に紹介し、岡本へ教えに行く事になったのだと云う。また、松阪寅之助（青溪）著『青い苔』所収「日本音曲の美を語る」によれば、谷崎は、カバンに入る継ぎ棹の三味線を買って、東京へ行く時も携帯し、地唄を稽古し

ていたと云う。こうした体験が、『蓼喰ふ虫』『盲目物語』等に影響を与えた事は、周知の事実である。また、菊原検校の《三味線には仕掛がしてあると云ふ噂まで生じた》というエピソードは、春琴のエピソードとして用いられたもので、春琴の天才芸術家としての造型に、検校がモデルとして用いられた事を示唆するものと言える。

谷崎が検校の人格を讃えるに、《人となり極めて明朗快活で名利に疎く、後年大検校の地位に達してからも単純で無邪気であったことは小児と異なるところがなかった》と述べている所からは、谷崎の人間観・価値観が窺われると共に、谷崎が検校を芸術家としても人間としても、いかに高く評価し、敬愛していたかが俚べれよう。

なお、この碑文の紹介については、菊原初子氏、及び、菊原光治氏の御許しを得た。ここに感謝の意を表します。

* * *

検校菊原琴治君は明治十一年十二月二十五日錨商播磨

徳兵衛の長男として大阪北堀江五丁目に生れ名を徳太郎と呼んだ 君には弟と妹が一人づつあったが二人とも早死をし 君も亦四歳の時に両眼の明を失ひ 六歳で父に 九歳で母に死別した 幼少にして俄に天涯孤独の身となった君はその年即ち明治十九年二代目菊原検校後の菊植明琴検校の養子となって布原姓を冒し糸竹の道を志すに至り 地唄箏三絃は専ら菊植検校から野川流三絃本手組唄は二代目菊仲繁寿一検校から学んだ 君は天賦の才に加ふるに克く当年の酷烈苛辣な稽古に耐へて十三歳の時には三代目菊原琴治と称することを許され十八歳で早くも東区伏見町に琴三絃の指南所を開いた 君は不幸にして両親の慈愛に浴することが薄く辛苦艱難の道を歩んだにも拘らず人となり極めて明朗快活で名利に疎く 後年大検校の地位に達してからも単純で無邪気であったことは小児と異なるところがなかった さうしてただ全精神を傾けて芸道一途の精進を続けた 而も一面斯道の発展興隆のために力を貸し 自宅に於て後進を教へ導く傍時には市立盲啞学校の教師となり時には当道音楽会の本部長に推さ

れ時には中尾都山氏と全国各地に演奏旅行を試みて三曲合奏の流行を促し昭和時代に入ってからには或は箏曲音楽学校を設立して初代校長に任じ或は関西三曲家協会の会長に選ばれたりしたが同十一年府立泉尾高等学校の邦楽部講師を嘱されてからは逝去の年までその職にあった されば君の芸術と人格とを敬慕する者は年を追うて多く既に大正三年の秋には一門が寄つて琴友会を組織した 君は又新たに自ら作曲したものも少からず摘草銀世界雲の峰最中の月春琴抄秋風の辞菊の寿等数へきれぬ曲を後人に伝へた 君の生田流琴曲家としての名声は東京にまで鳴り君の三味線には仕掛かしてあると云ふ噂まで生じた程で大阪にその人ありとは中央楽壇の夙に認める場所であつたが資性恬淡で情誼に篤く生涯郷土を捨ててゐることを欲せず昭和十九年三月二十五日享年六十七歳を以て浪華の地に歿したなほ君は高松氏の女つねを娶り今の菊原初子氏を遺したので幸に君の芸境の一半は息女に依つて窺ふことが出来るのである

昭和三十歳次乙未五月

旧門人 谷崎潤一郎撰

炭山南木 書

4. 無 題

昭和三十年八月二十五日発行「文芸臨時増刊 武者小路実篤読本」所収アンケート回答

質問は、
 ①、あなたは武者小路実篤の愛読者ですか？
 ②、武者小路実篤の作品で何が一番好きですか？
 ③、武者小路実篤からあなたの学んだものは？
 であつた。谷崎が武者小路実篤に好意を持っていたことは、『きのふけふ』等からも分かる。

* * *

谷 崎 潤一郎

小生は武者小路君の人間全体が好きなので、愛読者でもあります。そんなによく読んであませんから二については今俄には答へられません。三についても簡単に云へる言葉がありませんから差ひかへます。

5. 『近來の快挙』

昭和三十年九月(?)の大映映画『新・平家物語』パンフレット

このパンフレットは、二十ページほどのもので、奥付はないが、内容から見ても、九月二十一日の映画封切り直前に発行されたものと推定される。他に、吉川英治・勅使河原蒼風・猪熊弦一郎・石垣綾子・徳川夢声・鈴木茂三郎・浦松佐美太郎・坂西志保・神近市子・中島健蔵・宮田重雄が言葉を寄せている。なお、『新・平家物語』は、溝口健二監督・市川雷蔵主演で、谷崎の願い通り、翌年一月、十一月に続篇・続々篇が封切られた。

* * *

近來の快挙

作 家 谷崎潤一郎氏

大映が吉川英治氏の新・平家物語を総天然色を以て映画化すると云ふ。これは真に近來の快挙であるが、私はむしろその企画の遅かったことを不思議に思ふ。

と云ふ訳は、凡そ日本の歴史を顧みて、平家物語の時代からの起伏に富んだ、絢爛で豪壮な色彩映画に適した時代はないからである。そこには優雅な平安朝と剛健な武家政治とが持つ美しいものの、勇しいものの、悲しいものの、醜しいものの、殆どすべてが結集されてゐる。

此の両面を備へた時代は、平家物語の時代を除いては後にも前にもないのである。今や吉川氏が此の物語を現代に生かして一大絵巻を繰りひろげつつある際に、色彩映画に常に特技を発揮する大映がその原作に恥ぢないやうな作品を成就してくれることを、私は大いに期待する。尤も今回は若き清盛の登場する最初の部分に止まるさうであるが、願はくはつゞけて続篇続々篇を作り、日本人だけでなく、世界の人々に、日本の過去の此の時代の、貴族や庶民の生活の種々相を知って貰ひたいと思ふ。

6. 書 簡

「あまカラ」昭和三十五年一月号編集後記欄に全文が引用紹介された。

これは、昭和三十四年十二月号の「あまカラ」に掲載された『幼少時代の食べ物の思ひ出』のルビの誤りについて、谷崎が手紙で指摘し、「あまカラ」編集人の水野多津子が詫び状を出したのに対して、谷崎が重ねて送った書簡である。

* * *

唯今お詫状拝見致しました。

私としましては「元」の字の有無はさう問題にしてゐないので、大坂町の「坂」に「ざか」とルビをふられたことを甚だ不愉快に感じるので。原文にルビが施してないのに勝手にルビを施したことも不都合ですが、おまけにそれが間違つた読み方をされてゐるのは溜りません。お手紙に依ると校正をしたのは専門家で而も東京生れの人ださうですが、大坂町を濁つて読むのでは田舎者です。江戸つ子ならオホサカ町と読む筈です。

近頃は東京人でも無闇に濁つて読む癖があるのは困つたものです。金色夜叉の貫一は「高利カシ」になつたので「高利ガシ」になつたものではありません。「カウ

リガシ」と云へばアイスクーキのことです。油紙は「油ツかみ」で「油がみ」ではありません。「油ツかみに火がついたやうだ」と云ひますが「油がみ」では感じが出ません。

昨夜テレビで落語を聞いてゐましたら「駒形」を「コマガタ」と云つてゐるのでびつくりしました。「君は今コマガタあたり」ではほとゝぎすも啼きさうもありません。若輩の落語家のやうでしたが、落語家までがこれですから他は推して知るべしです。

以上、黙つてゐられなくなりましたから又書きました。雑誌の余白へお載せ下されば幸甚です。

十二月三日

谷 崎 生

水野多津子様

追伸

なほもう一つ、前号掲載の拙稿に脱漏があるのを発見しましたからこの機会に訂正致します。即ち終より五行目に

牛なべの鍋は

とあるのは「牛なべの鍋のは」とあるべきで、「の」の字を一字落しました。これは校正係の誤りではなく筆者自身の責任であります。

7. 『自分の好きな作品を』

河出書房新社『現代の文学』全四十三卷内容見本

これは、河出書房創業七十七周年記念出版として、昭和三十八年五月から配本された『現代の文学』の内容見本に掲載された推薦文である。ちなみに、この時の編集者は、川端康成・丹羽文雄・円地文子・井上靖・松本清張・三島由紀夫であった。

* * *

自分の好きな作品を

作家 谷崎潤一郎

作家ばかりの編集で、小説らしいおもしろい小説をあつめると云ふことには、大いに賛成である。選ばれた作家の顔ぶれも多彩で、いい作品が収載されると云ふので、たのしいものが出来ると期待してゐる。自分の

作品も、戦前の「卍」「武州公秘話」と戦後の「鍵」「瘋癲老人日記」と云った、なかなかおもしろい選び方をしてゐるし、どれも自分の好きなものばかりなので、よろこんで参加した。

【談話類】

以下、談話の類を紹介する。

1. 無 題

「東京日日新聞」明治四十四年十月十一日（五）面

これは、「文壇の彗星谷崎潤一郎」と題した記事中の談話で、向島の笹沼別荘で語ったものである。明里千章氏が、「初期谷崎に於ける『颯風』の位置」（『三田文学の系譜』所収）で紹介された。「大阪毎日新聞」には記事がない。本来、この年七月で卒業の筈の谷崎が、国文科二年在学と書かれている所から見ると、谷崎は留年していたのであろう。

内閣は、この年八月三十日、第二次桂内閣から第二

次西園寺内閣に変わり、警保局長も九月四日、有松英義から古賀廉造に変わっていた。

小野賢一郎の『明治・大正・昭和』に、《谷崎潤一郎氏と交際の始つたのは（中略）谷崎氏の三田文学の小説が発売禁止になつたので、私が向島の笹沼別荘に訪問したのが、その皮切りで（中略）二人でよく遊びもし、飲みもし、食つても歩いた。》とある事から、この談話を取ったのは小野賢一郎と推定される。この後谷崎が、「東京日日新聞」に『あくび』を執筆したのも、『青春物語』によれば、小野賢一郎の推挽と依囑の結果であつた。大正三年七月に、小野賢一郎の『新聞記者の手帳』に谷崎が序文を寄せたのも、小野賢一郎が創刊した雑誌「草汁」の大正七年六月号に、谷崎が『伊香保より』を寄稿したのも、こうした交遊関係あつての事である。二人の交遊関係が、何時頃まで続いていたかは定かでないが、小野賢一郎の句集『雲煙供養』に、昭和六年高野山で、「親王院に谷崎君の来訪を受け共に盆踊を見にゆく（四句）」という詞書のある「踊るとて谷崎潤一郎踊らざり」などの句が

ある事から、少なくとも昭和六年までは続いていた事が分かる。

ところで、大正四年十月号の「女の世界」に掲載された町の蛮人の「女難の谷崎潤一郎」という文章には、「谷崎が向島の「喜楽」のおかよという同い年の芸者と深い仲となり、「喜楽」に多額の借金を作り、心中か、前橋で芸者をしているおかよの姉の元へ駆落ちする事を迫られた時、遊び友達の小野賢一郎が「東京日日新聞」社長に二百円出させて、二人を気分転換の為に京都へ旅立たせた。旅先で二人の恋は冷め、おかよは亀戸で芸者を続けた。」という意味の事が書かれている。この記事は、必ずしも信用できないが、お加代は、『熱風に吹かれて』の春江のモデルかと想像される。(『熱風に吹かれて』の斎藤は恒川陽一郎が或る程度までモデルではないかと思う。) 中河与一の『耽美の夜』も、向島の「喜楽」から亀戸に住み替えるお加代という芸者を登場させて、それを谷崎の最初の妻である千代子の姉初の事としているが、どうだろうか。この談話では、来月京都へ行きたいと言っているが、

この希望が実現した明治四十四年の時は、旅費を「東京日日新聞」が出した事、この旅行を小野賢一郎とその上司の松内則信が幹旋した事などが、『青春物語』にも出てくる。また、『青春物語』には、京都行きに際して、谷崎の馴染みの芸者が、白木屋で絹セルの袷を見立ててくれた事が出てくるので、当時馴染みの芸者がいたことは事実である。辰野隆の「旧友谷崎潤一郎」によれば、大正二年の夏、辰野が小田原に谷崎を訪ねた時、谷崎は、近い内に一人でか二人でか死ぬと語っていたと云うし、野村尚吾は、『伝記 谷崎潤一郎』の中で、土地の古老の談によれば、谷崎は小田原の早川で、自殺未遂か心中未遂事件を起こした事があると伝えている。そして、この年十一月に執筆した『捨てられる迄』の主人公は、女の眼前で自殺する事を夢見ている。これらの情報を総合して考えてみると、「女難の谷崎潤一郎」の記述は、不正確であるにせよ、幾らか似た事実があった事は、十分考えられるのである。

* * *

「私も危いとは思ひましたが、遂々やられました、三田文学の人々にお気の毒です内閣も変つたし警保局長も判つた方といふので書きましたが不^ふ可^かなかつたんですね、之れからは大に恐縮して又変つた方面を書きます、モデルも何もなかつたので

▲舞台は今春友人と 旅行した東北地方にしたのです、未だ長く書きたかつたのだが締切の都合で彼^{あんな}魔^まものになつて了ひました、私は是迄名高い作家の許へも行かず書てはゐたが公にせず^にデツとしてゐました、之れからは一生懸命でやります、大学^(国文科二年一高出身)の方も長らく行きませんがモウ

▲断然退校して作家 として立つ心算です、大学も作家としてよい人が出ぬようぢや困りますネ、まア当分は此の見込はないでせう、酒ですか酒はやりませ、然し私は人には負けぬ方ですが小山内君には叶ひませんネ、鴻の巣へよく飲みに行きましたが近頃は此家^で▲日本酒を欠かさず やる計りです、酔つて書いては見たが醒めて読むと矢張り拙いです、「飜風」のやうなものは私の知つた人で四五人書いて見たいと云つてゐ

ますがマア当分は其筋で許しますまい、外国物には随分酷いのがありますがネ、気焰も何もありません唯恐縮してゐます来年は

▲脚本を盛に書いて 見る考へで劇でも今流行るやうな夢の様なものぢやなくて実世間に触れたものを書くつもりです、来月は京都へいつて彼の辺を材料にしたと思つてゐます」

2. 無 題

「大阪朝日新聞」大正七年十月十一日(七)面

これは、「谷崎潤一郎氏の支那行き」と題した記事中の談話で、九日午後四時の汽車で東京駅を發つ直前に語つたものである。「東京朝日新聞」には記事がない。

* * *

「ナニ遊びに出掛けるんです、ざつと二月ばかりの予定で京城へ行つてから奉天夫から北京漢口の順序です南京には是非行かうかと思つて居ます、何か面白い話の土産でもあればいいですが……」

3. 無 題

「東京朝日新聞」大正七年十二月十二日（五）面

これは、「●生活の革命を図る為に／二箇月余り支那旅行した／小説家谷崎潤一郎氏帰る／◇気のない顔をしながら『何れ其中／◇旅行記でも出版させよう』といふ」と題した記事の中から、谷崎の談話の部分のみを抜出したものである。中国旅行から、妻子を父に預けていた日本橋蛸殻町一丁目の米穀仲買店全商店に帰宅した十一日昼過ぎに、記者に語った談話である。「大阪朝日」には記事がない。

《休戦の報》は、十一月十一日にドイツと連合国が休戦協定に調印し、第一次世界大戦が終わったというニュースである。なお、谷崎には、『廬山日記』があり、太田正雄（木下李太郎）や牯牛嶺への言及もある。『廬山日記』では、第一日目は十一月十日（日曜）だが、二日目・三日目は何故か十月十一、十二日になっている。しかし、この新聞記事からも、十一月が正しい事が分かる。

*

*

*

「北京から九江への汽車は成る可く支那人ばかりの車を選んだので言葉が判らなくて困った、馬賊が出るといふので夜は危険な所を走らないから九江迄二日もかゝつて了つた、廬山には大分長く滞在した此の山の中に牯嶺といふ所があつて此処は今から

▲廿数年前 に英国人のリットルといふ人が拓いて外人の避暑地にした処ださうで恰度私が此処に滞在してゐる時に休戦の報が来た此処には独逸人が沢山逃げて来て何でも百七十人も居るといふ事だったが英米人も二百人ばかり居て其の晩は黒いあの山の中で爆竹をボン／＼鳴らすやら大騒ぎだった、私も晩八時頃出て行くリットルの家の庭で日本人が四五人居て一緒に「君が代」を

▲合唱して 祝はうという談だ、遂々私も西洋人の出鱈目な楽器に合せて唱ひ大騒ぎをやつた」

（此の旅行で貴方は生活の革命をやるんだといふ噂でしたが）

「そんな事は……」「何れ旅行記でも出版して見ませう」

4. 無 題

「読売新聞」大正十年八月二十六日(七)面

これは、須藤鐘一撮影の写真入り記事中の会話である。谷崎は、この後間もなく、横浜市本牧宮原八八三に転居した。

* * *

(「小田原の住み心地はどうですか」

「悪はくなく^(や)いですが、もう此地も近々引き上げようと思つてゐます、移転先は横浜で、もう家も借りてありますよ」

5. 無 題

「大阪朝日新聞」大正十二年九月二十一日夕刊(二)面

これは、「無事の家族を連れ／谷崎、小山内氏等神戸へ」と題した記事中の談話である。二十日午前十一時半、郵船上海丸で神戸に着いた際に語ったもので、小山内薫・岡田八千代の談話も掲載されている。「東京朝日新聞」には記事がない。

* * *

横浜へ引返し焼跡に行つて見ると家族の立退先が立札

に書いてあつた、それを辿つて附近の家に行つて見ると元ゐた家の附近の或外国人の尼さんが身を以て遁れて私の家族達をも引取り二三日前まで世話をして呉れてゐたのだが、更に東京の私の親戚の家へ送り届けたとのことで、私はその場から東京に向け出発した、途中大森で一泊してやつと山の手の親戚に辿りついて私の家族と再会した次第である

6. 無 題

「読売新聞」大正十三年十二月十四日(四)面

これは、「明春四月フランスへ／旅立つ谷崎潤一郎氏」と題した記事中の談話である。

* * *

「未だ確実に何日と決定したわけではないが明年勿々出発したいと思ふ家族を連れて行くことは未だ決めてゐない、たぶん一緒に行くことになるだらう」

7. 無 題

「神戸又新日報」大正十五年七月二十四日（九）面
 これは、「芝居に少し／地震の事を／谷崎氏の来着」と題した記事の中から、谷崎の談話の部分のみを抜き出したもので、二十三日午前十時、バナマ帽に背広姿で、神戸市栄町の神戸又新日報本社を訪れ、重役室で語ったものである。

《岡山》とあるのは、《岡本》の誤植である。市居義彬氏は、その著『谷崎潤一郎の阪神時代』の中で、谷崎は、後に買い取って建て増しをする事になる岡本梅ヶ谷の農家井上とみ方を、仕事場として昭和二年秋から借りていたと考証されたが、実際には、さらに一年前の大正十五年夏から借りていた事が、この記事から判明するのである。大正十五年九月号の「映画時代」に掲載された岡田嘉子との対談『一问一答録』が、七月二十一日に、岡本の山の中腹にある谷崎の山荘でなされたという古川緑波の「編輯日記」からも、この事は裏付けられよう。

谷崎が、地震の事を入れようとした芝居は、『白日夢』かと思われるが、実際には入れなかった。

なお谷崎は、二十三日の夕方には、岡成志の縁で、「神戸又新日報」の有坂忠平宅での文芸漫談会に招かれた事が、『三つの場合』に出ている。

* * *

「このころ毎日岡山やまの梅林の上の方に一軒かりて仕事してゐるがたいへん涼しくてよく書ける。どうしても夜がおそくなり、午前五時ごろ寢床にはいることもある。それで午前中の来訪者諸君にはよく御迷惑をかけてゐる」

（村税について）

「私のところも今年は昨年よりずっと多いが村に悪い病気が流行つてゐるからだらう」

「私のうちには元気な女中がある前にどこかの受負師か何かの家にゐたので無心者を帰らせる呼吸を心得てゐる。それをうちの来客中、私の面会したくない人々に応用してゐるらしい。三、四人づれで談じ込む連中を台所となりか、どつかに入れておいて、自分は窓の外に立ち、部屋の中の客に猛烈に毒づく、中のお客が乱暴し出したら逃げ出すのに都合がいゝのださう

な、お客も相手が女中なのでたいい口喧嘩を切り上げて引き上げるらしい」

(神戸測候所見学について)

「芝居に少し地震のことを入れたいので、参考に見たいと思つて……」

8. 無 題

「大阪朝日新聞」大正十五年十一月二十三日(十一)面

これは、『猫の家』を訪ねて―谷崎潤一郎氏の猫の趣味談を聴く―と題した記事中の談話である。「東京朝日新聞」には記事がない。恐らくこの記事を見て、隅野滋子・武市遊亀子・白髭ふきら、大阪府立女子専門学校英文科第一期生の仲良しグループが、本山村北畑の家に猫を見に来たのが切っ掛けとなり、古川丁未子との結婚へと繋がって行つた事は、高木治江著『谷崎家の思い出』の後書きとして書かれた山下滋子氏の「思い出の人々」等から推定される。

* * *

「一時は十一びきどころぢやないもつとゐたんですが人にやつたり

入院させたり して、今はそんなにゐません、猫つて実に繁殖力の強い動物でしてね、春秋二度に子をはらんで、六週間ぐらゐで産をしますが、時によると、秋に二度も生むことがある。だから、五六びきも飼つてをれば、手にをへぬほどふえて来る。あまり多くても何だし、それに雄の方がベルシャとドイツの混血で、あまりたちがよくないので、去勢してやりまして、近いうちに

花婿のいゝの を買つてあてがつてやります。しかし雌はみんな外国種の純粹なのばかりです、イギリス猫は剛巧で俊敏だが愛玩用としてなら何といったつてベルシャが一等です。毛が長くつて雪のやうに白く、眼が銀色に光つて……性質は幾分の、ろまで、チョツと亡国的なやうなところもあるが、姿態の優美で崇高なところは何といつても

猫族中の王様 でせうネ鼠を取らせるのなら、スマートで慥悍なのがいくかも知れませんが観て楽しむた

めに飼つて置く猫に鼠を捕せるなんてことは絶対に禁物です、鼠を追はせると、きめ、顔の相が悪くなつてきます、前夜鼠を追つかけたかどうかは、翌朝顔をちよつと見たゞけで直ぐわかるぐらゐですからネ。ですからなるべく

気分を平静に してやつて、なごやかな環境のうちに置いてやらないと性質がわるくなり、従つて表情も悪化します、僕の方では毛並をつや／＼しうするため、毎朝生卵をやつてゐますが、とても贅沢な奴でしてネ、地卵だつたら食ふが上海卵だと匂ひを嗅いだゞけで寄りつかない。魚も下魚だと口にしません、で、んぶでも鯛なら鯛、鯉なら鯉とチャンと

食ひ分けると いった調子で、可なり世話です。が、可愛がり出すと実に可愛いものですよ」

「夜遅うまで原稿に熱中して、ほつと息づいた時など

ストーヴの側 で猫がゴロ／＼喉を鳴らしながら円うなつてうづくまつてゐるのを見ると、何かなしにからかつて見たいやうな軽い気持ちになる。「どうだい」

と声でもかけてやると、猫の奴、待ち兼ねたといはんばかり、眼を糸のやうにしてペチャ／＼頬をなめにやつてくる、膝の上にかき上る、袖にからみつく。毛をすりつけに来る。猫族にのみ恵まれたあのしなやかな肢体と、柔かい毛——技巧の限りをつくして、懷ろに飛びこんでくるところは

実に可愛い、そいつをあやしたり、からかつたりしてゐると、その瞬間だけでも気もちがスツツとして疲れが一時にケン飛んでしまふ。格好のペツトですよ」

9. 無 題

「大阪朝日新聞」昭和二年一月二十九日（五）面

これは、「日本では上演禁止／仏国では大好評／谷崎氏の「愛すればこそ」と題した記事中の談話で、岡本の自宅を訪ねた記者に語ったものである。「東京朝日」にも談話はあるが、大阪の方が長いので、「大阪朝日」を採った。

なお、この上演については、『饒舌録』（昭和二年八月「改造」）にも言及がある。

* * *

「そのことについては数日前（二十一、二日ごろ）突然外務省から簡単な問合せがあつたので差支へはないが上演したら舞台の写真をとつて送るやう取はからつてくれとの返事を出しておいた、ドイツで上演するといふのだから多分ベルリン辺りの劇場だらうとは思ふが、訳者はもちろん劇場の名も俳優の名も判らないので今のところ乗気になるもならぬもない、多分私の学生時代同じ大学で親交のあつた元ロシア人で目下フランスに帰化してゐるエリセーフ君の仏訳を更に誰かゞ重訳して上演するのだらう、うまくゆけばよいがと思つてゐる」

10. 『女らしい』

「大阪毎日新聞」昭和四年八月十九日（七）面

これは十七日に、寺内正毅の次男陸軍歩兵大尉寺内毅雄が、三十八歳で盲腸炎で病死した通夜の席上、夫人の綾子二十八歳がピストルで後追い自殺を遂げた事についての談話である。「夫人の殉死を何と観る」と

いう見出しの下に、他に、高島米峰・仲人だった日本勧業銀行理事杉浦儉一・山田わか・柳兼子・綾子の父で東京府知事中川健蔵の談話が掲載されている。「東京日日」には谷崎の談話はない。

* * *

女らしい

谷崎潤一郎氏談

女らしい死に方だ。だが恋愛観や時代の新しい古いといふ問題でなく、いつの世にもかういふことがある。勿論さう沢山あるわけではない。特殊の場合であらうが愛する人を失つて死ぬといふのもよからう。たゞ子供などがあれば子供のためからいつてもまた近親へ迷惑をかけるといふ点からいつてもあまり感心しない。たゞ悪いといふ感じはしないが、有名な家庭のことだから騒ぐのであらうが率直にいへば個人のことで大して問題にするほどのことはない

11. 無題

「大阪朝日新聞」昭和五年二月十一日（二）面

これは、「省線夙川踏切で／自動車、列車と衝突／博文館「新青年」編輯員渡辺温氏／キネマ評論家ら四名死傷す」と題した記事中の談話で、事故に遭った友人の橋原茂二と渡辺温を西宮回生病院に見舞った際に語ったものである。橋原は、長谷川修二というペンネームで「新青年」などにしばしば寄稿していた。「東京朝日新聞」には記事はあるが、谷崎の談話はない。なお、この事故については、先にも挙げた『春寒』に詳しい。

* * *

渡辺君が僕の原稿を取りに来て死んだのは實際気の毒である、実は昨日（九日）昼僕のところになぞ／＼原稿を取りに来たのだが忙しのでことわつたが東京から来たといふので少しは書かうと今日それを書いて渡すことにしてゐたのに……誠に気の毒だ、あの踏切には僕はいつも用心してゐる、貨物列車のヘッドライトはいつも暗くなつてゐるのはよくないことで鉄道省に抗議すべきだね……運転手に聞いて見ると列車のヘッドライトが暗い上ガラスが曇つてゐたゝめか光がよく見えなかつたといふことだ

12. 無 題

「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」昭和五年八月十九日（七）面

これは、所謂細君讓渡事件の際の談話で、有名なものだが、念の為にここに掲げておく。談話は「大阪毎日新聞」の方に依つた。なお、同紙に掲載された諸氏のコメントの中には、松子の夫根津清太郎のものも含まれていて、《本月の四日か五日に谷崎君夫婦に佐藤君を交へ、谷崎君方で色々と話しました》と語っているのは興味深い。

* * *

「まアその通り……理由ですか、それや文壇方面では知つてゐるものもありませう、何しろ十年來のことで佐藤君は私の前の家内（千代子夫人）をすいてゐたし前の家内も佐藤君が好きであつたのです、そこで今度前の家内、親戚その他関係者一切ときれいに諒解のもとに行つたもので、娘の鮎子もスツカリ納得して佐藤君の元に行くことになり過日來私のところに来てゐた佐藤君に伴はれてこの十五日に東京へ行きまし

た、多分廿四日ごろにはこゝへ来るでせう、私
ですか？一人でこんな広い家にゐても仕方が
ないので何処かへ小さな家でも借りてこの家は
鮎子の学校の都合もあるので当分佐藤君等に貸すこと
にしました、さうですネ前の家内とはかれこれ十六
七年同棲してゐました、元は前橋の芸妓ですヨ、
その芸妓がひとの妾をしてゐたのですが旦那が駄目な
なり姉のところに入入してゐました、その姉といふの
が待合をして私と知り合になり姉の世話で一しよにな
り、まア

家庭の妻としては別段どういふこともないのです
が何うも性が合はない、佐藤君も好きな人が別に
出来て一時同棲したがこれが面白くなかつたと見えて
その後わかれて独身でゐた、私もその時分好きな人が
あつたりしている／＼と面倒に思つた、前の家内は佐
藤君が好きであつたが最近佐藤君の方が非常に熱心
でもあつたのでいよ／＼話をきめたまで、十六七年も
同棲したことだからそれや多少の思出もないことはな
いがまるつきり知らぬ人にゆづつてしまふのではなく

友人の佐藤君にだから安心してやれる殊にもう会へな
いといふのぢやなし私も時折は世話にもなれるし前の
家内としても幸福になれることだからと思つて決行し
ました、未練といへば未練でせうが皆諒解のもとにや
つたのです、この月の末にでもなつたらまた執筆のも
もあるので無論内地ですが……どこか

旅に出て気分をかへようとこゝろぐんでゐる……あ
ゝ今小出檐重君（洋画家）が来てゐるこれから散歩を
しようといつてゐるんだ、まア話はこれくらゐで失敬
しよう」

13. 無 題

「大阪朝日新聞」昭和五年八月十九日（五）面

これも細君譲渡事件の際の談話で、有名なものだ
が、念の為にここに掲げておく。「東京朝日新聞」（七）
面にも談話はあるが、大阪の方が長いので、「大阪朝
日」を採つた。

* * *

十六年間つれそつた妻です、女としてはこれといふ欠

点ありませんが、僕がこんな性格だから性格的には少し合はぬところもありました、六、七年前に一度ゴシップ子の口の端にのぼつたことがあつたが、その時にはまだ僕もそこまでの決心はつきかねたのと、その後生活の場所が違つたりしてあれの気持もそのことを忘れてゐたやうです、こんどは佐藤の方から話があつたので千代の気持も聞いた上でかうすることになりました、次は鮎子の問題ですが、あれももう十五だし数年の間にはどうせよそこにかたづけねばならない、幸ひ佐藤なら気心も知つてゐるし子供もゐないからあれと一緒にへ行つて貰ふことにしました、僕はこの家にゐるのも少し変だから綺麗さつぱり旅に出ることにしました、住むのはやはり関西にします、武林は外遊を勧めるが今のところそんな気はありません

14. 無 題

「大阪朝日新聞」昭和五年九月九日(五)面

これは、「谷崎鮎子さん／学校から突放さる／そんな家庭の子は困る／転校するか寄宿舎に入れ」と題

した記事中の談話である。「東京朝日新聞」には記事がない。鮎子は所謂細君譲渡事件のどっちりを受け、結局、通学していた阪急沿線仁川の聖心女学院を退学し、東京の文化学院に転校する事になった。

* * *

「実は学校の方から転校させるかさもなくて寄宿舎に入れてくれといはれてゐるのだが鮎子は腺病質で身体が弱いし、片親に離れたものを寄宿舎に入れることも可哀相なので困つてゐるところだ、こゝ一兩日もすればどちらにか定ると思ふ、学校の方では今度の件について鮎子の籍まで佐藤にくれてやるやうに誤解してゐるのではないかと思ふ、何れにせよ親達の事件で子供まで世間から拒まれるやうでは可哀相ではないか」

15. 無 題

「大阪朝日新聞」昭和六年一月二十四日(五)面

これは、「谷崎氏が／婦人記者と結婚／来月上旬岡本で同棲?」と題した記事中の談話で、古川丁未子との結婚について、二十三日午後、滞在していた東京日

本橋茅場町の東洋ホテルのサロンで語ったものである。同日の「東京朝日新聞」(七)面にも、同様の記事が出ているが、談話は大阪の方が長いので、「大阪朝日」を採った。

なお、一月二十五日の鳥取の「因伯時報」にも、古川丁未子との結婚が報道され、丁未子の父憲の談話が掲載されている。

* * *

まだ正式に決つてゐないから僕の口からいふことは避けたい、先方の親達に対する遠慮もあるからな、僕は前から好きではあつたが年が違ふので遠慮してゐた、幸ひ本人は来てくれるといふので喜んでゐる、佐藤たち夫婦との友情はその後少しも変りはない、僕としても古い感情の一切を清算して朗かに結婚することが出来る、あゆ子はやはり佐藤たちの方で見てもらふことにする

16. 無 題

「大阪毎日新聞」昭和六年一月二十四日(七)面

これは、「結婚を語る谷崎氏」と題した記事中の談話で、やはり古川丁未子との結婚について、東洋ホテルのサロンで語つたものである。同日の「東京日日新聞」(七)面にも同様の記事が出ているが、談話は大阪の方が長いので、「大阪毎日」を採った。

* * *

エ、どうして判りましたか、私_レどもとしての話は結婚といふところにも進んでゐます、古川は大阪の女子専門を出た人で卒業前から友達と私の家に入入りし**師弟** 関係がありますその後私から関西中央新聞へ記者に推薦し、昨年八月菊池(寛)君に話して文芸春秋社に入れて貰つたのです、私としては最初年も違ふしどうかと思つたのですが、世話する人があつたのでこの十五日上京後話を具体的に進めたのです、たゞ古川の父が一応辞退するといふ手紙を寄越したので私からどうか申すことは今のところ出来ないのですが私としても何れ

直接 古川の父に面会して話をするつもりです、古川

と知合つたのは前申す通り三年來の知合で私の前の妻

や子供達もよく知つてゐます、私としては勿論いざ結婚するからには相当の媒酌人を立てゝしたいと思ひますが佐藤（春夫）君の方がまだ式を挙げないのでそれが済んでからにしたらと思つてゐます、式は勿論大阪で挙げたいと思つてをります、実は昨日（廿二日）初めて菊池君に話をして春秋社の方の暇を貰ふことにしました

佐藤 はまだこの話は知らないでせう、私としてはまづ弟子として私の家に引取り、よく双方で理解をした上結婚といふことにしたいと思つてをります、古川とは上京以来もよく会つてゐます、本人も結婚には賛成してくれました

「今度の結婚は例の夫人離婚事件の起る前からの筋書ではないのですか」

いや決してそんなことはない、前から好きは好きであつたがそこまでつきつめては考へてはゐなかつた、もしさうならナンで私から推薦して東京によこしませう（あなたとして古川さんのどこに魅惑を感じられたのですか）

それは困つたナア、もちろん

女房 にしたいと思ふ位だから好きなのは好きなのですがそれはどうかうと私の口からいへない、誰かに聞いて下さい、弟子として引取るといふことも私が独身だし、世間ではまた何か変に考へるでせうがこれはやりたいと思つてゐる

17. 無 題

「報知新聞」昭和六年一月二十四日（七）面

これは、「婦人サロンの記者と／結婚する谷崎さん」と題した記事中の談話で、やはり古川丁未子との結婚について、東洋ホテルのサロンで語つたものである。

* * *

「おれも一人者だしまあ結婚するやうな氣になつたのだ、しかしまだはつきり決つたといふ訳ではない、丁未子さんは以前から僕の家へ時々来たりするのでよく知つてゐる、結婚しても佐藤が（春夫氏のこと）結婚式をあげるまでは披露せぬ積りだ、まあそれまでは秘書の形でゐてもらふつもりだ」

18. 無 題

「大阪毎日新聞」昭和六年五月十九日（七）面

これは、「谷崎氏夫妻／高野山へ／密教の研究に」と題した記事中の談話で高野山へ出掛ける前日の十八日午後、岡本梅ヶ谷の自宅で記者の質問に答えたものである。谷崎は、《西宮あたりの小さいところへ引越したい》と言っているが、これは、当時、根津夫妻が西宮市外大社村森具北蓮毛八四七に住んでいたからであらう。事実、谷崎は、高野山を降りた後、昭和六年十一月上旬から七年二月四日まで、西宮市外森具の根津家別荘別棟に移り住む。ただし、その頃この別荘は、既にお金に困った根津清太郎が《整理のために売り物に出し》（『初昔』）空家になっていたと言う。

なお、「東京日日」には、三ヶ月滞在の予定とする記事はあるが、談話はない。

* * *

——高野山で密教を少し調べたいと思つてゐる、しかし僕のは信仰ではなく骨董いぢりと同じだよ、大体僕は人が想像してゐるやうな官能的な雰囲気は嫌ひで昔か

ら古寂な寺が好きだ、震災後京都の東山三条で無住の寺を一人で借て住んでゐたこともある、こんども静かな山寺の書院で鐘の音でも聞きながら少し纏まつた仕事をしたいからで密教の研究は従た

（——奥さんは？）

——一緒に行くよ、明日とりあへず身の廻りのものだけまとめ十日位の予定で出かける、気持がよければ下女を呼んで自炊生活してもよいと思つてゐる、僕も家族もへつたし、こんな大きな家は不経済だから早く売払つて西宮あたりの小さいところへ引越したいんだが不景気で買手がなく弱つてゐるんだ……君高野でも牛肉が食へるかね

19. 無 題

「東京日日新聞」昭和十三年九月十一日（七）面、「大阪毎日新聞」（十一）面

これは、「古典の寂びを生かし／『源氏物語』の現代版／谷崎潤一郎氏が五年の精進／三千四百枚の長篇成る」と題した記事中の談話で、十日午後、滞在してい

た渋谷区大和田町九二という旅館で記者に語ったものである。ここには「東京日日新聞」の談話を掲げた。

* * *

「さうですね、この源氏物語を書きはじめてからザツと五ヶ年の日子がたちました、はじめ準備に二年、本当に書き出してから三年、その間一切の仕事を抛つて情熱を打ちこみました」

「なにしろ三千三百九十一枚といふ尠大なものになり自分でもよくこれだけのものを書きつゞけたものだとい驚いてゐます、ズツと住吉の宅で殆ど毎日かゝさず書いたのですがほかの仕事はなんにも出来ませんでしたはじめ好きな源氏を現代文に直して見ないかと友人に薦められましたが古文の香を失はずに新しい文章で「ものゝ哀れ」の精神をそのまゝ生かすといふことは生やさしい努力でない、とつくづく悟り、かねて尊敬してゐた東北帝大教授山田孝雄博士に校閲をねがひ全く親切な御助力指導に預かりこの難かしい事業を完成しました、こんど出版に当つても「山田博士校閲」と記さしてもらふつもりです

源氏五十四帖、これを毎月二冊宛刊行して全部で廿七冊とし一頁は原稿紙一枚として百五十頁くらゐのものにして一ヶ年に出版して貰ひたいと考へ西洋綴の和本といふ落ついた感じのものにしたいと願つてゐるんです、しかし読み返してゐるうちにはきつと意に充たないところが出るだらうと思ひそれは機会があるたびに改めて一生かゝつても完璧なものになるやう努力し世界に誇る源氏の内容をわが国民の多数の人に理解して貰ひたいとそればかり願つてゐます」

20. 無 題

「東京朝日新聞」昭和十三年九月十一日(十一)面

これは、『源氏物語』昭和に再生／千四百枚の口語訳を脱稿／谷崎氏五年の難事業」と題した記事中の談話である。「東京日日新聞」のものと同日に、同じ旅館で語つたものと思われる。「大阪朝日新聞」には小さな記事はあるが、談話はない。

* * *

源氏物語の妙味は言葉少なの点にある、作者が女性な

ので露骨に説明せず描写も暗示的だ、ここに文学的魅力があると思ふ、だから口語訳といつても源氏を講釈することは困難なことであり、しかも文学的価値を落すことにもなる、意味よりも文学的な味を、一つの創作としてこの文学的な魅力の再現が僕の口語訳の主眼だった、仕事も一段落したので数日中にお世話になった山田博士にお礼旁々種々打合せに仙台へ行く心算だ

21. 無 題

「朝日新聞」(大阪版)昭和二十三年十二月四日(二)面
これは、川田順の所謂老らくの恋事件の際の談話で、三日夜、熱海市山王ホテル別荘で語ったものである。東京版にも談話はあるが、大阪版の方が長いので、大阪版を採った。

なお、川田順の『孤悶録』「ちゑなしの記」(二二)によると、谷崎は、この時、熱海からツキナカゴロカヘリオメニカカリマス」ユウキアレ」タニザキト打電し、十九日に帰洛、二十日午後、川田を見舞ったという。

* * *

「熱海へは先月二十六日から来ているが、川田君からの遺書とか手紙とかいうものはまだ手にしていない、俊子さんは夏ごろ離婚し、博士があとぞいをもらつたなら川田君と結婚ということになつていたはずだ、京都では地理的にも近いし、私を一番頼りにしているだろうが、このごろは会っていない、離婚後のことではあったが夫人と一緒に訪ねて来たので君一人なら来てほしいけれど一緒に来るのは見合せてくれといったので遠慮しているのだろう、俊子さんについてはあまり言いたくはないが歌の弟子だ、京都では、社会的にも非難を受け、友達も遠ざかつていたようであつた、子供があり、子供に対する愛情や主人に対する複雑な感情もあるうし、川田君にしても同様のことがいえるのである二人の心境如何では情死行などということもないとはいえぬ、友人の安否に関することだから場合によつたら京都に帰る」

22. 無 題

「毎日新聞」(大阪版)昭和二十四年一月三日(四)面

これは、大阪版だけに掲載された「谷崎源氏 少将滋幹の母／描く平安朝の二女性／豊艶の筆すすむ潤一郎氏」と題する記事中から、記者との問答のみを抜き出したものである。昭和二十三年末に、南禅寺の寓居（恐らくは、この頃よく仕事場に使用していた南禅寺の塔頭真乗院）で、記者の質問に答えたものである。『少将滋幹の母』が終わったら、現代もの・戦後もの・没落階級の乱脈な崩れ方なども書いてみたいと言っている事は、『鍵』『鴨東綺譚』『瘋癲老人日記』などの、最初の萌芽とも見られる。

なお、全集に収録されている『少将滋幹の母 作者の言葉』は、東京版では一月一日の（四）面に掲載されているが、大阪版ではこの記事の隣に掲載されている。

* * *

（――大分はかどりましたか）

――ええ十回分ぐらい

（――一日平均どのくらい進まれますか）

――まア三枚というところでしょう、昔から変りません

――朝ですか、大体八時ごろからもうと早い時もありますが、それで午後二時ごろまで続けます昔はペンだつたが最近はずつと筆ですよ、それも以前は筆でもつていきなり原稿紙に書いたのですが最近は一たんペンで下書きをしておいて筆で清書するのです、清書の時間だけおくれる勘定ですが元来遅筆の方ですからペンでも筆でもスピードは変わりませんね、ええ一日三枚くらい……

（――こんどの小説に現れる女はどういう女でしょうか、作者の好みの型ですか）

――女は主なものは二人出て来ます、一人は今昔物語などにも出ていて比較的よくわかつているのですが、も一人の方は実在していたことに間違いないがよくわからない、そこに多少作者の想像が加えられる余地がある好みの型といつても元来私は作中の人物にあまり個人的な好悪を出さないつもりになっているのですが

（――現代的な解釈を施すという意図はないんですか）

――昔の女は実際にはどの記録を見てもみな同じようで名前さえ残らないものが多くボンヤリしています、

これをあんまりハッキリ個性を出してしまうとかえつて昔の女の特徴がなくなるんじゃないですかね、だからある程度個性つけても近代化はしないつもりです、もつともこれはもくろみであつて書いて行くとどうなるかそれはわからない

(——この小説が終つて後の御腹案は?)

——いろいろありますよ、今後十年生きたら何と何と何とをやりたいというもくろみは立っているのです、例えば源氏物語をもう一度訳し直すこと、もちろん現代ものの構想もあります、戦後もの、没落階級の乱脈な崩れかなども書いて見たいんですが何しろそういうものは東京でしょう、京都にいますとも……

23. 『細雪について』

『朝日新聞』(大阪版) 昭和二十四年一月三日(四)面

これは、大阪版だけに掲載された「朝日賞に輝く業績／美しい風俗絵巻／七ヶ年の労作「細雪」と題する記事中の談話で、『細雪』に対して昭和二十三年度朝日賞を授与された際に語ったものである。《全編に起

伏のない、主観を全く出さぬ東洋流のものを書きたかつた》と言っている所が、特に注目される。

* * *

細雪について

谷崎氏談

「細雪」は昭和十七年に書きはじめて翌十八年正月から中央公論に連載のつもりだったが、二回きりで載せられないことになった、戦時中の圧迫がいろいろと私の上にもおそつて来たからである、もつとも最初は直接私に干渉があつたのではなく、私はむしろ中央公論の編集者よりも弱気だった、しかし、この作は、その数年前から書こうと腹案を立てゝいたものだから、こんなことで筆を折る気にはなれなかつた

そのまゝ発表のあてもなしに書き続け、上巻の分だけまとまつたところで、自費出版として二百部だけ作つた、当時、出版は許可制でなく、届出ればよかったが、たちまちおとがめをこうむつた、あとは決して出さないという始末書を要求されたのだつたが、それは遂に出さずにしまつた、強いて出そうとすれば用紙の

方で押えられたらう

私としては自費出版した作はこれ一つしかない、だから執筆を放棄する気は全くなく、その後も、空襲や疎開騒ぎで筆は進まなかったが、中絶させなかったのである、戦後になつて中巻も出し、下巻の分は婦人公論に連載して、廿三年春に書き上げたのが秋に完結し、下巻も出版され、七年目に完成したのである

その間、こればかりにかゝつていたわけではないが、私としては一ばん長くかゝつた作である、源氏物語の現代訳は、あれで四年しかかゝらなかつた、人からもいわれているように、源氏物語に手をかけたことが、この作に役だっていることは否定し得ない

全編に起伏のない、主観を全く出さぬ東洋流のものを書きたかつたのである、しかし戦時であつただけに、自然つまらないことに遠慮せざるを得なかつた、あのように明るい面ばかりでなく、不良マダムなども出して、退廃的な面も書くつもりだつたが、あのような甘いものになつてしまつたのをいさゝか不満に思っている、しかし、それよりも心配したのは、戦後にす

つかり時勢が變つてしまつて、あのようなものは、もうだれも読む人がないのではないかと考えていたが、さいわい、よく読まれているようだ、また、新しい人たちから、いろいろ批評も受けてもいるようだが、また推薦してくれる人もあつて、このような賞に預ることになつたのを、たいへん光榮に思っている

24. 無 題

「朝日新聞」(東京版)昭和二十五年六月三十日(二面)これは、東京版だけに掲載された「源氏物語」を完訳に／谷崎氏が再び執筆」と題する記事中の談話で、熱海の「雪後庵」で語つたものである。皇室崇拜の谷崎らしいコメントと言えよう。

* * *

「源氏」は宮中の不始末や乱倫な行為を題材としたものであるけれども、どこまでも小説であつて事実ではない、皇室御自身もこの書が優れた芸術作品であることを昔から理解しておられ、歴代の帝王の中にはこの書を愛読された方が何人もある、したがつてこれを完

全に現代語に訳したからといつて、いまさら皇室の方々が不快を感じられるとは思われない、いまや適当な時期が来たのであれを初めから訳し直し完全なものにしたいと思う

25. 無 題

『京都新聞』昭和三十一年十二月二日(七) 面

これは、「谷崎氏京を去る」と題した記事中の談話で、十二月一日に下鴨潺湲亭で語ったものである。

潺湲亭は、松子夫人の女学校時代の友人が日新電機の専務田中軀次郎氏の夫人だった関係で、日新電機の寮となり、翌年春、石村亭と名付けられた。稲沢秀夫氏の『聞書谷崎潤一郎』によれば、谷崎が提示した「石村亭・五位庵とあと一つの中から、田中軀次郎氏が選んだという。また、伊吹和子氏の『文豪の日々』によれば、石村亭は、庭に大陸渡来らしい石の像が幾つかあった所から思いついたものである。

《来年の仕事》については、永栄啓伸氏が『谷崎潤一郎―資料と動向』で紹介された昭和三十二年一月号

「文芸」の『二つの小説』でも、「週刊新潮」に浅草を主にした東京の事、「サンデー毎日」に大阪を主に関西を舞台にしたものを書きたいと言っている。が、結局どちらも書かず、「週刊新潮」には『鴨東綺譚』、「サンデー毎日」には昭和三十七年になって、『台所太平記』を書いた。

* * *

◇早いもので京都に住みついてもう十年、老来、京都の氣候が合わなくなってきたので去る決心をさきごろからしていた。幸いに家も家内の知合いの関係で日新電機に買ってもらえた。『潺湲亭』の名は熱海へもっていかない。寮の名前にという話もあったが字が難しいのでやめることになり私が名前を頼まれている。京都では余り外へ出ないので、知友も少なかった。友人といえば、新村出先生、吉井勇君ぐらい。さきごろ、新村先生の文化勲章拝受のお祝いに行ったが、今さら遅きにすぎる。僕らより先にもらっていい人だ。文化、芸術と近ごろとみに東京中心主義の弊がある。芸術院会員にしても市川寿海丈、井上八千代さんら関西から

も入れるべきだ。京都はやはり芸術の都として伝統芸術を残すように市民皆が努力すべきだ。京舞、地唄などいいものは京都にいくらでもある。思出といえ、僕の古稀の祝に、家内と家内の妹と、高折妙子夫人で、僕の作詞で井上さん振付「花の段」を舞ってくれたことだ。そのときまで知らなかっただけにうれしかった。京都を去っても、春、秋にはきたい「都をどり」も見にくるだろう。それに健康診断はやはりお互いに気心のわかった京大、阪大の先生がいいからね。来年の仕事は「週刊新潮」ともう一つ週刊誌に書く約束がある。

26・無 題

「朝日新聞」(東京版) 昭和三十四年十月十六日(七)面、大阪版(五)面

これは、「谷崎潤一郎氏の近況／衰えない創作意欲／右腕の痛みで口述筆記」と題した記事中の谷崎の談話のみを抜き出したものである。伊吹和子氏の『文豪の日々』によると、この記事が出て二三日すると、全国津

々浦々の読者から御見舞いの手紙が殺到したという。

* * *

「昨年十一月二十八日から右腕が痛みだした」

「二、三カ月でなおると思っていたのが、だんだん悪くなる。いろいろな医者にみてもらったのだが、原因がわからない。たぶん高血圧と動脈硬化なんだろうが、ともかく右腕が痛む」

「夢の浮橋は口述筆記になった。感想文ぐらいなら口述もいいが、小説となるとつらい。しかもはじめての口述だから、不なれのせいもあって思うようにゆかなかった。自分で筆をとったなら、もっとうまく書けたと思う」

「正宗白鳥の批評(読売新聞)がおもしろかったな。油っ気のぬけた作品だとかれはいていたが、たしかにその通り。わざと油っ気をぬいて書いたんだ。批評？ この年になれば批評ずれしてるから、悪意をもって書いた文章以外は気にならないさ」

(自作について語りたがらないことについて)
「テレくさいじゃないか。自分の作品を自分でなん

だかんだいうのは。自作の芝居でもみんなといっしょに見るのはやり切れない。近ごろの小説？ 目が悪いんでたいして読んでいないが円地文子の『女面』が大変おもしろかった。石原の『太陽の季節』もよかった。武田泰淳の『貴族の階段』は思ったより感心しなかったな。三島由起夫の『鏡子の家』は読もうと思ってまだ読んでいない。とにかく文壇もすっかり変わってしまったなあ」

「書きたいことはまだまだあるが、長編はもうむりだろう。せいぜい二、三百枚ぐらいの小説だね。腕さえよければ……」

「ぼくは小説の筋は書きながらつくる。書くのは遅いが構想はすぐまとまるんだ。いまはこんな調子で仕事はしないが仕事をしないのも苦痛でね。もう少ししたらまた小説を書く。そうしなければ時間が消せないよ。そのために、口述を練習する。メガネ屋にいったメガネの度をあわせる。腕さえよくなったら……」

27. 無 題

「朝日新聞」(東京版)昭和三十八年十一月六日(二)面
これは、東京版だけに掲載された「人 三たび源氏物語の現代語訳に取組む／谷崎潤一郎」と題する記事
中の谷崎の談話のみを抜き出したものである。

* * *

「体がいうことをきけば、やりたいこともあるのだけれど、食べる方も、すぎると心臓に悪いと医者に制限されているし、まあ仕事をしている間がいちばん楽しいですね。いやなことや体の痛みも忘れていられるし」

〔「源氏物語」現代語訳について〕

「前に二度訳しているから、こんどはそんなに時間がかからないでしょう。当分はこれにばかりきりですね」

「このごろ、二つも三つも一度に小説を書いている作家が多いというけれどどうしてそういうことができるのですかね。いい小説が書けるのでしょうか。志賀(直哉)君にしたって里見(淳)君にしたって、ぼくらの年代では考えられない」

【作者記】

以下、作者記の類を紹介する。

1. 『華魁 作者記』

「アルス」大正四年五月号

『華魁』末尾の注記である。締切りに間に合わなかったのは、この月二十四日に石川千代と結婚する為に、準備に時間を取られたせいもあったかも知れない。「アルス」が『華魁』の為に発禁となった事もある、結局この小説は、中絶してしまった。

* * *

此の小説はもと／＼一つに纏めて、五月号へ載せて貰ふ積りだったが、とうとう締切に間に合はないので、已むを得ず前半だけを掲載する事とした。後半は其の二として次号の締切迄に書き上げて了はうと思ふ。

作者記

2. 『玄舁三蔵 附記』

「中央公論」大正六年四月号

* * *

附記、本文中に引用したラマヤナの詩は、自分の手許にあつた Romesh C. Dutt 氏の英訳に拠つた。氏はベンガルの貴族の家に生れて、後英国に留学し、一九〇九年に Baroda で死んだ印度の名士ださうである。日本文に訳して出さうかと思つたがともうまくは訳せないし、英語の方がエキゾテイクに聞えると思ふ便利もある、そのまゝ借用した。(作者しるす)

3. 『金と銀 前書』

「黒潮」大正七年五月号

『金と銀』は、連載する予定だった「黒潮」が五月号で廃刊になった為、七月十五日発行の「中央公論」定期増刊「秘密と解放」号に、『二人の芸術家の話』と改題して、全文が掲載された。

* * *

此の小説は百枚以上の長さに亘るので、最初から全編

を四部に分ち、本号と次号と二箇月に跨つて本誌へ連載することにした。どうか其の積りで読んで貰ひたい。
(作者しるす)

4. 『嘆きの門 作者曰く』

「中央公論」大正七年九月号

* * *

作者曰く、此れは可なりの長篇にする計画で、最初の第一回だけを本誌の九月号へ載せたのである。今後、一と月に一回乃至五六回ぐらゐづゝ二三箇月に亘つて連載しようと思つて居る。

5. 『画舫記 前書』

「中央公論」大正八年三月号

* * *

此れは本誌先月号に載せた蘇州紀行の続稿である。其の積りで読んでくれるやうにちよつとお断りして置く。

6. 『画舫記 追記』

「中央公論」大正八年三月号

現行のテキストでは、追記を削つて、「蘇台竹枝曲」のみを、末尾に掲げてゐる。

* * *

追 記

以上の記事は、わづかに蘇州の運河の風趣の一端を写生したに過ぎない。私は前号にお断りして置いた父の重病と云ふ事情が、未だ取り除かれないために、蘇州の美しさを茲に充分に紹介する余裕のない事を憾みとする。そこでせめても、「聯芳樓記」の詩文を左に引用して、此の紀行文の不足を補はうかと思ふ。なぜかと云ふのに、「聯芳樓記」に載つて居る蘭蕙姉妹の蘇台竹枝曲ほど、あの美しい水郷の氣分を切実に云ひ現はしたものはないからである。――

姑蘇台上月团团

姑蘇台下水潺潺

月落西辺有時出

水流東去幾時還

門泊東吳万里船
寒山寺裏鐘聲早
烏啼月落水如烟
漁火江楓惱客眠

洞庭金柑三寸黃
東南佳味人知少
笠沢銀魚一尺長
玉食無由進尚方

楊柳青青楊柳黃
妾似柳糸易憔悴
青青變色過年光
郎如柳絮太顛狂

一縷鳳髻綠於雲
斜倚朱欄翹首立
八字牙梳白似銀
往來多少斷腸人

7. 『愛すればこそ 作者記』

「改造」大正十年十二月号

* * *

(これは最初三幕物として書き出したのだが、縮切に間に合はなくなつたし、且これだけでもそれ自身完成した一幕物として通用すると思ふから、先づ一幕だけ発表する事にした。しかし、あと二た幕に全体の思想

の焦点があるので、それがないと気が済まないから、直ちに稿を次ぎ最近に発表する積りである。作者記)

8. 『愛なき人々 第二幕 作者記』

「改造」大正十二年一月号

初出表題に、『戯曲 愛なき人々—三幕四場—』と書いてある事からも分かる様に、ぎりぎりまで、第二幕を二場にするつもりだったようである。

* * *

(作者記、——此の幕は第二場を設ける積りで最初に第一場と書いた。が、途中で予定を変へることにした。)

9. 『神と人との間 作者記』

「婦人公論」大正十三年九月号

四カ月間休載した後、連載を再開しようとしての、弁明である。

* * *

(作者記——予定より書き出しがおくれたので、今月

号には沢山載せられませんでした。目下続稿を急いで
ゐますから来月号で埋め合はせいたします。)

10. 『痴人の愛』 作者記

「女性」大正十三年十二月号

『痴人の愛』は、「大阪朝日新聞」への連載が中止に
なり、前月から「女性」に舞台を移して連載を始めた
ばかりだった。

「朝日新聞」への連載中止については、従来、風俗
壊乱が理由と見なされてきたが、真の理由は、別にあ
ると思われる。谷崎は、対談「谷崎文学の底流」(昭
和三十三年一月「中央公論」)の中で、連載中止の原
因を問われて、『朝日新聞』が、理由を言わないんで
すけど、大体わかっていますよ。ちようど今と同じよ
うに、アンチ・アメリカの気風が非常に盛んで、それ
で新聞社が困つたんでやめさしたんだと思います。』と
答えている。連載が突如打ち切られたのは、大正十三
年六月十四日の事であるが、実は、その十日ほど前の
六月五日、「朝日新聞」「毎日新聞」など各紙は、アメ

リカの排日移民法に反対する共同宣言を掲載してい
る。また、六月七日の夜には、帝国ホテルのダンスホ
ールへ右翼の壮士達が乱入して剣舞を演じるという事
件も起きている。七月一日からは、松竹・日活の決議
により、アメリカ映画排斥運動も実施された。この様
な反米感情の盛り上がり結果、『痴人の愛』は、ア
メリカかぶれとして排斥されたいのである。

* * *

今月は大変短くて申訳がありません。正月号で完結の
予定でしたが、まだまだ先が長いので、多分来春へ持
ち越すことと思ひます。これから以後は毎号もつと沢
山載せます。——作者記

11. 『青塚氏の話』 作者記

「改造」大正十五年九月号

『青塚氏の話』は、初出末尾に(前篇終り)とある
ので、中絶作品である。

* * *

締切に追はれて今月は余り書けなかつた。もつと涼し

くなつてから沢山書かうと思ひます。——作者記

12. 『正 作者註』

「改造」昭和四年四月号

『正』その十四の冒頭に付されたもので、前号・前々号には、その十二・その十三が掲載されている。

* * *

(作者註。——前号及び前前号の二回分は作者の聞き違ひのために事実を誤まつたところが多い。いづれ単行本として出版する際に筆を加へるつもりであるが、あらましを云へばその夜柿内未亡人は夫を籠絡したのではなく、真に心から己れの罪を悔い、一旦は全く光子をおひ切つて貞淑な妻になることを誓つたのださうである。彼女は初めは逆らつたけれども、後には夫の愛情に動かされてその手にする気になつた。即ちその晩の夫婦喧嘩はしまひにほんたうの和解に達したのであつた。その心持ちであとを読んでいただきたい。)

13. 『武州公秘話 作者申す』

「新青年」昭和七年二月号

前回掲載分の終わりの章の標題「法師丸、戦場に於いて人の鼻を削ること、並びに武勇を現はすこと」を訂正したものである。

* * *

作者申す、前回の標題に「戦場。に於いて」としたるは「敵陣。に於いて」の誤まりにつき訂正いたします。

14. 『武州公秘話 作者申す』

「新青年」昭和七年四月号

* * *

作者申す。——いつも編輯者の嚴重なる督促を受けながら既に二回も休載をしたことは読者諸君に申訳ありません。作者は生来遅筆のところへ、昨秋以来三四度も居所を変へたために落ち着いて机に向ふことが出来ず、遂に斯くの如き始末となつた次第です。今回はあまり短かきやうなれども、さう再三休む訳にも行かないので、辛うじてこれだけを締切に間に合はせました

が、既に住所も確定しましたから今後は毎月充分の枚数を以て完結に至るまで弛まず努力する積りで居ます。幸ひに御愛読を賜へと云爾。

15. 『若き日のことども 作者申す』

「中央公論」昭和八年二月号

* * *

作者申す——昔語りも大分長くなつたので、今一回次号に書いて一と先づ打ち切らうと思ひます。右一寸お断りまで。

16. 『聞書抄(第二盲目物語) 初出末尾』

「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」昭和十年六月十五日夕刊(一)面

『聞書抄』の末尾は、現在の全集本文との異同が多い。また、この末尾は、作品本文と明確な区別を付けないまま、作者記へと移行していると考えられるので、ここに紹介することにした。

* * *

(前略)

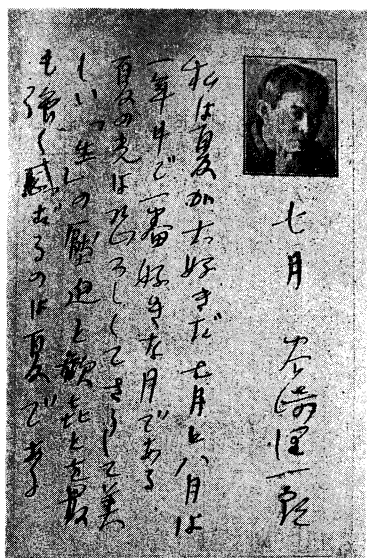
「あはれなるかな悲しひかな、かく痛ましくあらんと兼て思ひなば、見物に出でまじき物をと、千悔の声々も多かりけり、廿余人伐かさねければ、河水も色を変じたり」と云ふその日の河原が如何にきらびやかな地獄絵巻を繰りひろげたか、——私は実は、「聞書」が伝へる順慶の直話に依つてその光景を詳しく紙上に再現し、併せて順慶が、弓矢を捨てたのみか琵琶をも捨て、或る時は悔い、或る時は怒り、或る時は悟り、或る時は狂ひつゝ、遂に一生恋ひしい人の幻影を盲ひた眼から消すことが出来ず、迷ひに迷つて塚守りになつたいきさつを物語りたいのであるが、いかにせん作者の根気が足らず、日々一定の分量を書き続けることが困難なため、新聞社にも読者にも既に度々迷惑をかけてゐるので、近日「聞書後抄」と題し、某雑誌の誌上に於いて此の続篇を発表しようと思ふのである。終に臨み、長い間辛抱して下すつた読者諸君の寛容を謝するとともに、いづれその続篇の出た時は改めて御愛読あらんことを、お願ひ申しておく。(をはり)

【新潮日記逸文類】

以下のものは、新潮社が大正三年から昭和七年まで、『作文日記』『文章日記』『新文章日記』『新文芸日記』と名称を変えつつ発行した日記の中に含まれていた逸文である。なお、この調査には、新潮社の全面的御協力を得た。ここに感謝の意を表します。

1. 『大正五年 文章日記』七月の題辞

(写真1)



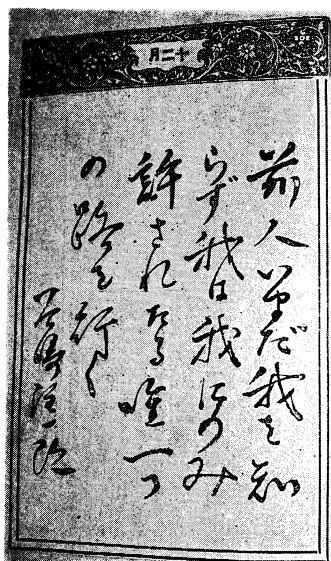
(写真1)

「七月 谷崎潤一郎／私は夏が大好きだ七月と八月は／一年中で一番好きな月である／夏の光は恐ろしくてさうして美／しい「生」の圧迫と歓喜とを最／も強く感ずるのは夏である」と読める。なお、この原稿は、橋弘一郎が入手し、『谷崎潤一郎先生著書総目録』第二巻付録に写真版で掲載されている。

2. 『大正十二年 新文章日記』十二月の「文芸入門者に与ふる言葉」(写真2)

(写真2)

谷崎自作の銘文と推定される。「前人いまだ我を知

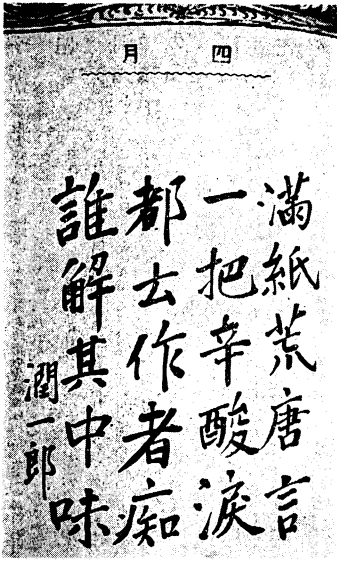


(写真2)

／らず我は我にのみ／許されたる唯一つの路を行く
／谷崎潤一郎」と読める。

3. 『大正十五年 新文芸日記』四月の「諸家
月々の言葉」(写真3)

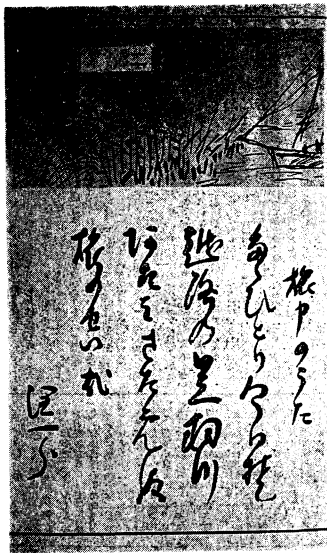
谷崎自作の漢詩と推定される。「満紙荒唐の言／一
把辛酸の涙／都云う作者の痴／誰か解す其中の味／潤
一郎」と読める。谷崎の支那趣味の現われであるが、
お世辞にもうまい漢詩とは言えない。



(写真3)

4. 『昭和六年 新文芸日記』二月の題辭
(写真4)

「旅中のうた／たゞひとり今日そ／越路の足羽川／
あすをさためぬ／旅の空哉／潤一郎」と読める。この
歌は、昭和七年三月号の「スバル」に、『倚松庵詠草』
として、「昭和五年九月、前妻と別れて北陸にあそぶ」
という詞書を付けて発表され、後に『谷崎潤一郎家
集』に収録された。足羽川は福井市を流れる川で、そ
の流域には、柴田勝家の北ノ庄城や朝倉氏の居城一乗
谷山城もあった。谷崎は、『盲目物語』執筆の為に、



(写真4)

この地を訪れたのである。

谷崎は、新潮社の『文章日記』の為に、愛唱する語句を書き、写真版で掲載している例がある。逸文ではないが、参考の為に、写真版で、ここに併せ掲げる事にする。

※『大正七年 文章日記』三月の「文章座右

銘」(写真5)



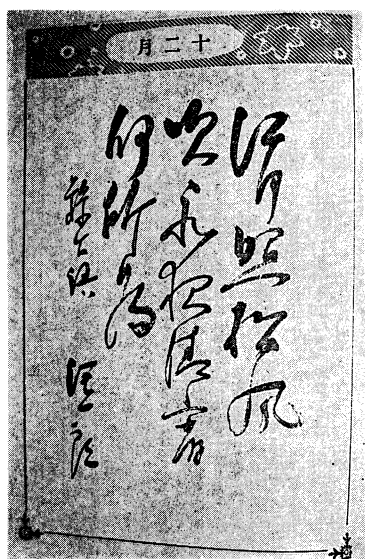
(写真5)

「海内文章／落布衣／為新潮社 潤一郎」と読める。これは、梁田蛻巖の『蛻巖集』四に収録された七言絶句「九日」の結句で、「日本を代表する詩文は、無位無官のこの私にしか作れない」という意味である。

※『大正九年 文章日記』十二月の「文芸入門

者に与ふる言葉」(写真6)

「江月照松風／吹永夜清宵／何所為／禪古語 潤一郎」と読める。これは、中国唐代の僧永嘉大師玄覺の

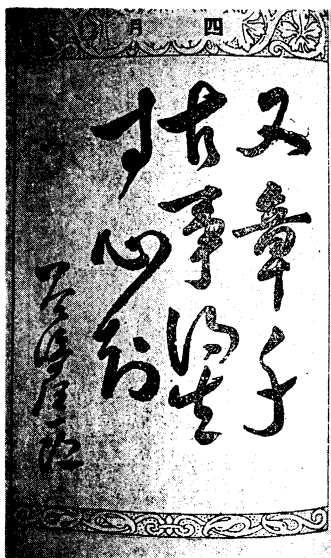


(写真6)

『証道歌』の一節で、悟りの境地を歌ったものだが、恐らくは上田秋成の『青頭巾』からの孫引きであろう。なお、谷崎はこの句を『蘆刈』に用い、更に『月と狂言師』でも、後半だけを引用している。

※『大正十一年 新文章日記』四月の「文芸入門者に与ふる言葉」(写真7)

「文章千／古事得失／寸心知／谷崎潤一郎」と読める。これは、『杜少陵詩集』卷十八「偶題」の起句で、「文学は永遠に残るものだが、その善し悪しは、ただ



(写真7)

作者自身の心が知るばかりである」という意味である。

※『昭和五年 新文章日記』十二月の題辭 (写真8)

「七尺の屏風も／躍らばなか越えざらん／羅綾の袂も／引かばなか切れざらん／潤一郎書」と読める。これは、『乱菊物語』でも使われている。その直接の典拠は、高野辰之の『日本歌謡史』第六編「邦楽



(写真8)

大成期、後半時代」第一章「初期の歌謡」第六節「等の組歌」二「組歌の由来」「菜路組の歌」の項と推定される。

なお、『谷崎潤一郎全集逸文紹介2』末尾で、全集逸文と推定した大正八年版『文章日記』（新潮社）所載『新年二題』は、『葬』からの抜粋に過ぎない事が判明したので、ここに訂正して置く。

また大正四年の『文章日記』は、新潮社にも無く、見る事が出来なかった。

【未確認逸文一覽等】

以下は、未確認の逸文である。

A. 『谷崎潤一郎全集逸文紹介2』末尾に書いておいた村松梢風の個人雑誌「希望」に大正四年～五年頃、掲載された四～五頁の談話というのは、大正五年三月三十一日「東京朝日新聞」広告に見える大正五年四月

「希望」春期特別号の『発売禁止に就いて』であるらしい事までは分かったが、未入手。

B. 『淀川長治自伝』によれば、「活動界」大正十二年四月号に、谷崎潤一郎の『映画芸術について』という談話が掲載されたようだが、未確認。

C. 野村尚吾の『伝記 谷崎潤一郎』によれば、谷崎は、土屋計左右の記念帳に、「大正十五年二月十四日谷崎潤一郎／上海の女の風俗は此の前來た時より悪くなった。昔風の劉髪が見られないのが殊に淋しい。着物も西洋臭くなったのは感心出来ない。」と書いたと云うが、未見。

D. 古書店のカタログによれば、昭和二年の『漠のパンフレット』（石井漠舞踊研究所文芸部）創刊号に谷崎潤一郎が何か書いているようだが、未確認。

E. 文芸春秋社の『昭和三年版 文芸自由日記』九月の「十二名家月々講座」として、谷崎の『詩と文字と日本語』が掲載されていることは、広告から分かるが、未入手。

F. 『彷彿月刊』一九九〇年五月号の関井光男氏の一

文によれば、村島婦之の『カフエー考現学』（日日書房刊）に谷崎潤一郎とのカフエー談義が収録されているが、未入手。

G・宮崎修二郎氏の『環状彷徨』に引用された浅田柳一氏の『酒都歳時記』によれば、谷崎の行き付けの飲み屋「京楽」のヒリョウズについて、谷崎は「中央公論」に『京楽のあげ袋』という一文を書いた事があるようだが、未確認。

H・昭和二十四年九月号の「映画ファン」に、京マチ子との対談が掲載されたようだが、未確認。

I・伊吹和子氏の『文豪の日々』によると、昭和三十五年二月十二日、一中節家元篠原治から、吉井勇作詞『関寺小町』に作曲したという速達が来たので、早速、推薦文を原稿用紙二枚分、口述したと云うが、未発見。

また、従来書き下ろしと考えられてきた『都わすれの記』は、雑誌「女性」の昭和二十二年一月号と二月三月合併号に、上下に分けて連載されたものである事

が判明した。（上）は入手できなかったが、昭和二十一年十二月二十四日の「毎日新聞」などに広告が出ている。（下）の方は入手できた。「かゝる世にあふこそ憂けれよき時に我がちゝはゝは失せ給ひけり」の歌の詞書から後が掲載されている。全集本文との異同はない。

その他、谷崎松子の『倚松庵の夢』所収「銀の盞」には、谷崎が昭和三十二年、井上八千代の芸術院会員任命を祝って作詞した『ほととぎす』の歌詞が、浜川博の『素顔の文人たち』には、昭和三十四年四月三十日「毎日新聞」夕刊に掲載された永井荷風の死に際しての谷崎の感想が再録され、橘弘一郎の『谷崎潤一郎先生著書総目録』には、『現代小説全集』第十卷「谷崎潤一郎集」巻頭の《たとへ神に見放されても私は自身を信じる 潤一郎》という筆跡が、写真版で再録されている。また、松子の『湘竹居追想』には、昭和二十二年一月からの『潺湲亭備忘録』が紹介されている。

【対談類】

次は対談の類である。

「読売新聞」大正十五年一月九日、十日（四）面「文芸」欄には、神代種亮の『谷崎潤一郎と語るの記』（上・下）が掲載されている。これは、大正十四年末の谷崎との対話を、神代種亮が纏め、文章化したものであるが、『大菩薩峠』に言及するなど、内容的に興味深いものがあるので、参考の為に掲げておく。

文中「蕃登二毛」で神代が引用している茂吉の歌は、「改造」大正十四年九月号に掲載された「童馬山房雑歌」中の「閑居吟其一」の歌で、正確には、「München」中「わが居りしとき夜ふけて陰の白毛を切りて棄てにき」である。「珍談奇話」に出る三菱ヶ原の「お艶殺し」とは、明治四十三年十一月十一日に東京丸の内三菱ヶ原で起きた強姦殺人事件で、谷崎の『お艶殺し』とは無関係である。「芸苑佳話」に、谷崎の『催情点』が上瞼であると出ている事は興味深い。『鍵』の主人

公の一月一日の日記に「僕ノ性欲点——僕ハ眼ヲツブツテ眼瞼ノ上ヲ接吻シテ貰フ時ニ快感ヲ覚エル」とある事と符合するからである。「阿迷飛魂」は、同じく神代種亮の『荷風先生と語るの記』（大正十五年七月十九日「読売新聞」）には「Amer picon」として出る。瀧田梧陰は、『有島さんと波多野さんの記念の為に』（『中央公論』大正十二年八月号）で、波多野秋子が、生前、好んで飲んでいたと書いている。谷崎は、昭和六年五月二十二日、六月十三日付け妹尾健太郎夫妻宛書簡では、『ピコン』をセックスの意味に使っている。

* * *

谷崎潤一郎と語るの記（上）

神代種亮

小 引

丙寅新春、潤一郎万金を携へて燕楚の地に遊ぶ。先だつこと数日書を寄せて東上を告げ、電を發して入京を報ず。歳晚天寒うして孤閨地冷かなるの時、枯木残草の暖風膏雨を迎ふるの想ひ有り。

偕樂園に興津庵に、銀座に築地劇場に、帝国客店に晩翠軒に、自動車に東家に、起臥食飲を共にすること三昼三夜、白日言々行人を驚かし、黒闇語々麗人を笑はしめたるもの、此に記して三都食道楽覚え書の続を完うし以て亡妻の霊に捧ぐ。

身長体重

種『足下の健康如何。同疾の糖尿亦如何。』

潤『極めて宜し。病痕全く無し。』

種『身長体重を問ふ。』

潤『身長五尺二寸。体重十六貫七百匁。血行甚だ良し。』

蕃登二毛

種『歌人茂吉の近什に、みゆんへんにわれをりしときよるふけてほとんしらげをきりてすてしか、の名歌有り。足下亦如何。』

潤『請ふ意を安んぜよ。蕃登未だ二毛を生ぜざるなり。但白濁の一疾、病根遂に全く絶つを得ざるのみ。』

珍談奇話

種『例に依つて珍談有りや。』

潤『有り。曩日仙台刑務所より公文書を以て懺悔書一通を郵致するの報あり。幾ばくも無く囚人某発送する所の稿本到達せり。上下二巻数百紙、題して懺悔書と謂ふ書に云ふ。お艶ごろしの下手人は即ち我にして、今刑場に臨まむとするに際し、半生を懺悔して以て貴下に致し、以て迷魂を弔はむとす。』

種『蓋しお艶殺しの材を三菱ヶ原に採りたるものと誤信せるものならぬ歟。』

潤『然り。足下山陰の僻邑に生れて却つて東都の故事に通ず、足下自ら拙老と号する、亦宜なる哉。』

種『考古は予の性癖のみ。頭顱未だ二毛を生ぜず、希はくば老を以て遇せざれ。閑話休題。お艶ころしは其の事の残酷なる実に前代未聞と称す。凄惨なる鬼氣の文字の間に迸れるもの有りしや否や。』

潤『巻頭数葉僅に之が顛末を略述せるのみ。他は皆是れ彼れの人生観にして、文字興趣無きこと甚だしく、流覽寧ろ厭倦を覚えたりき。』

座に画人草風あり。『然らば我に与へよ。お艶殺しの原稿、併せて珍襲する亦可ならずや。』

潤『諾。』

豊胖厚衣

種『足下外套を新調したるが如し。色感触共に洋猫を想はしむ。幾金を値したるや。』

潤『九十金也。』

種『地質稍厚きに失す。故を以て隆肩短頸、且つ少しく猫背なること足下の如きに恰好ならざるに似たり如何。』

潤『甚だ然らず。肥満者の瘦軀を装はむとする是れ醜なり。豊胖厚衣是れ我が好む所。葉囊地の袷羽織大に足下に恰適ならずや。』

種『或ひは然らむ。予は單書籍の表紙を転用せむことを案出し、期せずして足下の言ふ所に一致せるのみ。』

芸苑佳話

種『我鬼山人云ふ。刺青の作者其の誤植あらむことを患へて、親しく活字を拾ひたりと聞く。後生伝へて以て芸苑の一佳話と為し、随喜渴仰する者或は出でむと。』

潤『文字に腐心すること敢て人後に落ちずと雖も、自作の為に活字を拾ひたるは真に已むを得ざるに出でしなり。当時新思潮の印刷を託せし活版所大ならざりしが故に、同人皆出で、応援に赴きたるに止まるのみ。』

種『凡そ人体に催情点と名づくべきものが有るが如し。如何。』

潤『双眼を閉ちて上脛部を△△をして舌△せしむる是れ我が尤も快とする所なり。』

谷崎潤一郎の語(下)

神代 種 亮

大菩薩峠

種『大菩薩峠を読めりや。』

潤『読めり。構想筆力、凡衆作家の及ぶ所に非ず。近来、作者独得の持味と名づくべきもの漸く出づるに至れるは甚だ我が意を得たり。』

痴人之愛

種『痴人之愛、同題の小説三汀に在るを知らざりし

か。』

潤『居常雜誌を手にせず。全く之を知らざりき。而も之を知るや既におそし。我れ三汀の為に忡々の情に堪へず。』

洋袴二領

種『足下の洋袴常に折痕を存す偏奇館主人亦然り。

意を用ゐる至れる哉。』

潤『予洋衣を作るに毎に必ず上衣一領洋袴二領を以て完と為す。蓋し洋袴は旅中と雖も交々折疊着用せむが為なり。』

種『曾て荷風先生の雨声会に招かれたる時、羽織を重着し、浜町常磐の玄関に上るや一を脱して女中に手交し、観者をして驚かしたる事有りと聞く。憾むらくは風流宰相猶ほ健在にして雨声会の遂に開かれざるを。』

小紋縮緬

種『足下若年の比、縮緬のきものを作りたりと聞く。今如何。』

潤『顧みれば十有八年の往昔に属す。小紋縮緬のき

ものを着け、山高帽を冠りて北郭に花を折りたる事有りき。今は内居外出唯洋衣のみ、禹域再遊に際して、新に紋附を作らむとするも、旧式の七子を求むるを得ず。嘆ずべき哉。』

種『去秋樽蔭の葬に羽織袴にて臨みしは如何。』

潤『倉皇として上京し、礼装を携ふるに隙無かりしを以て、一友より之を借りたるなり。』

一雄三雌

種『足下幾匹の猫兒を蓄するや。』

潤『四匹なり。一は波斯種にして最も高貴なる者に属し、其の双親は米国の猫兒展覽会にて一等賞を贏ち得たるもの。二三は純英國種。四は日独の混血兒なり。冬夜之を摩すれば、時に驚くべき電氣を感じる事有り。』

種『猫輩亦主人に倣ひて美食するか。』

潤『然り。但だ主人は外に出でては力めて美食し、内に在りては麦飯に一汁一菜を敵守するの差あるのみ。凡そ猫族常に総身に光沢を保たしめむが為には、朝々必ず生卵を与ふるを要す。然るに四兒皆其の地玉

子なる時は欣然之を喫し上海卵なる時は唯之を嗅ぐに止まる。敏ならずや。又上魚鯛の如きは之を嗜めども、下魚鮭の如きものを混ぜれば之を避けて周辺の飯粒のみを口にす。巧ならずや。』

種『猫は亦疾むか。』

潤『然り。高価なる猫児は弱きが常なり。』

種『然らば四猫を養ふの資を以て一人の寝児を飼ふを得むか。我之を採らむ。』

阿迷飛魂

種『足下精氣老來の感無きや。』

潤『患ふるを要せざるなり。阿迷飛魂(アメピコン)と云ふ靈酒在り帝國客店ワインリストに之を載せずと雖も、就いて一盞を傾くるを得べし。請ふ之を試みむか。但し洋人の面前必ずや此の語を口にする勿れ。』

上海生活

種『上海に於ける生活を如何にせむとするか。』

潤『期を定めて一家を賃借し、房奴一人を僦ひ、飲食は之を外に求め、而して自動車一台を丸抱へにして以て出入に使せしめむとす。可ならずや。』

種『馬車亦可ならむや。』

潤『夫れ或ひは然らむ。』

種『往け。唯健康を念とせよ。』

潤『多謝(トウシヤオ)。人生五十を超えて益々旺盛なる意気を振ひ以て長大作を草せむか、我が心願唯是有耳。』

昭和二十二年十一月三十日の「週刊朝日」には、辰野隆との対談『忘れ得ぬことども(6)』が掲載されているが、その中で谷崎は、『細雪』について、「今のモダンガールみたいなものは書きやすいが、自分は昔ふうの引つ込み思案のごく内気な人が書きたい、そういう人間を間接に判るような書き方に興味を持っている、そういう書きにくいものを書きたい」と言っている。また、昭和二十三年二月号「婦人朝日」には、長谷川如是閑との対談『女性を描くことどもー源氏物語と細雪ー』が掲載されているが、その中でも谷崎は、妙子について、「閑西の女の不良は、東京ほどバァッとしなないで変に奥まっている。そこに書きにくいけれど、

書く興味があるので、『細雪』下巻には書くかと思っている。それも多少不十分にして、変な奥行のあるような厚ぼったい不良少女を出したいと考えているが、なかなか出ない。東京へんの不良のように思う事をずばずば言うのは書きいいが、興味が無い。内気な殆ど個性のないような昔風な因循な一種の古いタイプの女は、骨が折れるだけに、書くのに興味がある。あんまりはつきり出さないようにしてそれを出したい。そうすると少し長い小説でないと出せない。」という意味の事を語っている。個性の乏しい女性を描きたいという願望は、昭和の谷崎にほぼ一貫するものと言えよう。

その他、昭和三十年八月号「銀座百点」には、保坂幸治との対談『われらのティン・エージャー』中学生の頃―、昭和三十一年八月号「あまカラ」には、辻嘉一との対談『味の東と西』、昭和三十三年八月号「銀座百点」には、淡路恵子との対談『緑陰に語る』、昭和三十七年一月号「銀座百点」には、久保田万太郎・戸板康二・池田弥三郎・車谷弘との座談会『明治の学

生作家』、昭和四十年八月号「うえの」には、六月十九日、東京虎の門福田屋で行なわれた浪花千栄子・谷崎松子との座談会『谷崎潤一郎先生を訪ねて』が掲載されている。また、昭和三十五年十月号の「若い女性」に、叶順子との対談『猫のような魅惑』が掲載されている事が、伊吹和子氏の『文豪の日々』によって明らかにされた。

【ラジオ・テレビ出演一覧】

最後に、谷崎のラジオ・テレビへの出演について私を知り得た限りのものを、この場を借りて一覧表にしておく。

▼昭和10年6月2日夜7時半からJOBKで谷崎潤一郎・岡田嘉子・樋口富麻呂・和氣律次郎・矢田みよの座談会放送

▼昭和28年1月4日午前7時15分から新日本放送（現・毎日放送）で「新春放談」放送

▼昭和28年2月26日NHKで嶋中鵬二との対談「谷崎潤一郎よもやま話」放送。のち「私の交遊録」と改題して『文学の心2』（昭和50年9月きょうせい刊）に収録。

▼昭和29年7月24日午前8時半からNHK第一放送「趣味の手帳」で嶋中鵬二との対談「芥川龍之介の思い出」放送

▼昭和30年1月1日午後11時から11時40分までラジオ東京で志賀直哉・谷崎潤一郎・吉井勇・（司会）辰野隆による「新春座談会」放送

▼昭和30年1月3日午前11時から11時40分までNHK第一放送で吉井勇・後藤末雄との「新春座談会」放送

▼昭和34年11月2日午後7時半から8時までNHKテレビ「ここに鐘は鳴る」に出演

▼昭和35年2月1日夜7時半から8時まで文化放送の

「富崎春昇三回忌特集」で追悼談「春昇の面影」放送

▼昭和35年9月27日午後8時から9時までNHK第二放送の「教養特集 文壇よもやま話」で池島信平・嶋中鵬二との座談会「谷崎潤一郎さんを囲んで」放送。

のち『文壇よもやま話（下巻）』（昭和36年12月 青蛙房刊）に収録

▼昭和37年5月7、14、21日の夜10時半から11時まで、3回にわたってTBSラジオで谷崎潤一郎出演の『瘋癲老人日記』放送（大阪方面は朝日放送）

▼昭和39年9月27日朝9時5分から30分までNHKラジオ第一放送の「日曜訪問」で高峰秀子と対談